

○司会者（石丸） 皆様、大変長らくお待たせいたしました。今年も大方先生、宮里先生のお言葉を介し、またやってまいりました。それも、特別に乳児保育を語り合う熱い夏です。今回も、たくさんの熱い思いを胸に御参加くださった方々は、前回よりもさらに、さらに多くの皆様、262名の方々に御参加をいただいております。その開催場所も、これまで大切にしてきました乳児保育学科施設であるC学舎からは飛び出し、こちら、坂上記念ホールになります。どうでしょうか。今回、この会場への御参加になる大きな理由には、何と、今回は乳児保育部会を擁する学会理事長の無藤隆先生がついに、ついに東京から駆けつけてくださいました。部会長はじめ、部会員は特別な思いでこの日を迎えております。

これより日本乳幼児教育・保育者養成学会乳児保育部会主催、第3回乳児保育フォーラム@大阪総合保育大学を開催させていただきます。

私、本日、全体司会を務めさせていただきます乳児保育部会部会員・石丸るみと申します。

開会に当たり、主催者である日本乳幼児教育・保育者養成学会乳児保育部会部会長・大方美香より御挨拶申し上げます。

○大方部会長 ありがとうございます。

大阪の猛暑の中、今日はたくさんの方に御参集いただきまして、ありがとうございます。ただいま石丸から御紹介ございましたけれども、そもそも一般社団法人日本乳幼児教育・保育者養成学会というものがございまして、発表いただいている方も中にはおられるかもしれません。元は研究会からスタートした学会です。その中に乳児保育部会というものがございまして、後で紹介させていただきますが、そのときから五十何名の部会員が集いまして、いろいろな研究をしたり、学会発表をしたりしてきました。受付に置いておりますが、『今、この子は何を感じている？』という、お茶大こども園の先生方にも御協力いただきながら、みんなで研究したことをまとめたものが、この本でございますので、よければまた御購入ください。

この乳児保育フォーラムは、お茶大のほうでも、こどもフォーラムというものがございまして、それを参考にしながら、関西でも何かできないかということで、3年前に第1回乳児保育フォーラムをさせていただき、そして、今回は第3回ということになりました。

念願でありました無藤隆理事長に、ぜひこのフォーラムの雰囲気を感じていただき、先生がいつも語られている『愛と知の循環』としての保育実践』の話を関西で皆様とともに

に共有し、学べたらいいなということで、このたび、非常にお忙しい中、御無理を申しますと、この場にお越しいただきました。第1部のほうでは、皆様そろっての基調講演をいただきまして、第2部のほうは、それぞれの分科会に分かれまして、そして、私たちが研究してきたポスターを掲示していますので、今回はC学舎のほうで、また共に語りながら、乳児保育を真ん中に置きながら、子ども真ん中で保育の語りを皆様、していただけたらと思っております。

最終3時半までなので、少し暑い中の長い一日になりますが、どうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

○司会者 ありがとうございます。

それでは、これより乳児保育部会のメンバーをぜひ紹介させていただきたいと思います。では、壇上のほうに乳児保育部会のメンバーの皆さん、よろしくお願ひいたします。

（乳児保育部会メンバー登壇）

○司会者 大方美香部会長です。よろしくお願ひします（拍手）。

では、奥の先生方から、一番右側に立っていらっしゃいます先生から御紹介させていただきたいと思います。副部会長・宮里暁美（拍手）、部会員・上垣内伸子（拍手）、矢野景子（拍手）、野尻裕子（拍手）、山梨有子（拍手）、本田由衣（拍手）、八代陽子（拍手）、浅川茂実（拍手）、森永路子（拍手）、岡南愛梨（拍手）。それから、本日、参加できませんでしたが、ほか部会員、寺田清美、細井香も共にここにおります。今年度開催する午後の分科会では、乳児保育部会のメンバーが担当、午後の講座についても、理事長・無藤隆先生がさらに御担当いただくことになっております。

それでは、乳児保育部会のメンバーで今年度も本日の乳児保育フォーラムの開催を行つております。よろしくお願ひいたします（拍手）。

（乳児保育部会メンバー降壇）

○司会者 乳児保育部会の皆さんには、東京の大学の先生ばかりですので、昨日から東京から出てきていただいています。

それから、この開催に当たりまして、今年度は大阪総合保育大学総合保育研究所との共

催になっております。ご協力いただきありがとうございます。瀧川先生、ありがとうございます。ご担当代表は瀧川先生、研究所の所長です。よろしくお願ひいたします（拍手）。

続きまして、お待たせいたしました。無藤隆先生、檀上のはうによろしくお願ひいたします。——いよいよ、心待ちにしておりました無藤隆先生の基調講演です。乳児保育フォーラムでお話を伺います。本日のテーマは、「『愛と知の循環』としての保育実践」です。

「多様で豊かな世界と出会い、学び、育つ」を基本とする今年3月に出版された書籍を皆様も手に取られたでしょうか。当会場でも購入できます。お手元にある資料は、メモが取れるようにと1ページずつ記入できるように作成しております。ミスプリではありません。無藤先生の御講演に際し、どうぞ無藤先生からの資料は有意義に御活用ください。

無藤先生の御紹介については、副部会長・宮里暁美先生からお話しいただきます。

それでは、宮里明美先生、よろしくお願ひいたします。

○宮里副部会長 無藤先生、私から紹介をさせていただきます。

皆さんも御存じ過ぎる無藤隆先生です。私らしい紹介をさせていただきたいと思います。まず、基本的な情報になります。日本の教育学者、そして、お茶の水女子大学で教鞭を執っていたこともあります。そして、白梅学園大学の学長、白梅学園大学の教授などを経て、同大の名誉教授、また、同大学院での客員教授というお立場をお持ちになり、今もまた研究、そして、いろいろな研究者の支えといいますか、道しるべをたくさんつくってくださっています。

実は、お茶の水女子大学附属小学校の校長先生でいらっしゃったときに、私は、先生がそれをお辞め?になった後に附属幼稚園に入りましたけれども、その時期に小学校と幼児期、幼稚園の接続部分について、実践者を巻き込みながら新しい展開を提案・実施された。それが接続期という言葉が日本の中に定着した始まりだったと思います。

また、先ほど、乳児部会では、文京区立お茶の水女子大学の実践、ポートフォリオなどを基に、その本をまとめましたが、このお茶の水女子大学こども園が10年前にできたとき、文京区と大学が協力して、このこども園ができたときに、たくさん励ましていただき、最初のこどもフォーラムでは基調講演をいただいたことを懐かしく思い出します。そうやって立ち上がったこども園に対して、無藤先生は、乳児保育はこれから大事だよ、今まで大事だけど、いよいよ大事だということをすごく言ってくださいって、それが今につながっ

ていると思っております。

今日は、この『『愛と知の循環』としての保育実践』、たくさんの場所で大事な御講演をいただいておりますけれども、この乳児保育フォーラムの中で、午後はまたもう少し焦点を絞った形での語りの学び。また、部会に分かれた記録や、おもちゃというところ、あと食のことで学びを深めていきますが、その根底に愛と知の循環があるということが本当にすばらしいことだと思っています。

済みません、講師紹介と、私の思いをちょっと重ねてしましましたが、無藤先生に今日おいでいただき、御講演いただくことを心からうれしく思います。

無藤先生、どうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

○無藤氏 白梅学園大学・無藤です。よろしくお願ひいたします。

『『愛と知の循環』としての保育実践』という名前をつけましたけれども、最初に私が考えていることをお話ししようということなんですが、本文に入る前に、「保育実践」と表題をつけているので、お子さんの様子を多少お見せしようということです。

（パワーポイント）

これからお見せするのは、厳密に言うと私が見たわけではないですけれども、福井大学の附属幼稚園というところの園のたよりだと思うんですが、出している各種の写真です。わざわざ福井の附属幼稚園、最初にあるから、要するに公開してもいいことになっているので公開するのですが、同時に、私のこれから話す理論というものが、いろんな園で私が関わってきたことを基にはしているんです。特に中心的なのは、福井大学附属幼稚園の先生方といろいろディスカッションしてきたことが基になっているんです。

福井大学の附属幼稚園に、私は多分20年弱、毎年2回ないし3回ないし4回ですけど、コロナのときに1年くらい行ってない、リモートにして。幼稚園ですから、当然3歳児からで、乳児というわけではないんですけど、こういう具合にいろんな活動をやっています。福井の附属幼稚園の午前中のプランは、原則として、幼稚園ですから9時頃にお子さんが集まって適宜、1時間半くらいかな、いろいろなことをやっています。各自が選んだ、遊んでいて、一応、3、4、5歳と分かれていますけど、実際の活動はかなり交じりながらやっていて、その日に初めてする活動もあるし、前日からする活動もあるだろうと思うんです。

これは図鑑を見ているから、それを基につくっている。サッカーボールかな、こうい

う室内にあるもので何かつくっているところです。そういう遊びをやったり、これはボーリング風にしているようありますけれども、そういうことをやったりしています。これはお祭りごっこ——お祭りという行事とちょっと違うのですけど、子どもたちが勝手に「お祭りをやるよ」みたいになって、地域でやっているお祭りということ。お店屋さんごっことか、看板づくりとか、そういうものをやっている様子です。

それをどんなふうにやっているか。これはちょっと見にくいけど、左側にクラスの子どもたちが座っていますけれども、真ん中の子がその日につくったポスターか何かを説明している。これを「みんなの時間」と呼んでおりますけれども、先ほど、自由に遊ぶ時間が10時半前後で、その後1時間弱ぐらいですかね、40~50分かな、クラスに集まってやり取りするんですが、そのときに、こんなことやったよとか、それを聞いている子が、こういうふうにしたらいいんじゃないのみたいなやり取りをやっていて、最近、そういうものをサークルタイムと呼んでいることがあるかもしれませんけれども、昔からやっているわけです。

これは何だろうな、3歳児が何かを探していますけれども、虫。上は「アリの巣」と書いてある。アリの巣を見つけて一生懸命アリを見ている。下側の網のほうは……。虫取り名人と称する子たちがいて、結構捕まえている、この幼稚園は福井の町なかにもあるんですが、こう言つてはなんだけど、福井は町にしてもまあ田舎ですので、住宅地と共に畑とか、いろいろやっているところ。ちょうどこの附属幼稚園も多少見えますね。庭があつて広いですが、さらに隣が中学校のグラウンドが、半分草っ原みたいになっているんですが、めったやたら虫がいるわけです。

その時々でどんな虫を捕まえるか、いろいろですけど、よくあるバッタやダンゴムシということかな。うまくいくとトンボを捕まえる。チョウチョウを捕まえる。トンボも何種類飛んでくるんですけど、というようなことをやっています。

これは夏の水遊びか。

交流みたいですね。小学校の6年生かな、交流して、小学校で遊んでいる。

これは年中さんたちが室内でサッカー遊びです。まだサッカーとか余り分かっていない子たちです。まあこんなことをやっているわけなんです。

それを全部紹介していると切りがないので、何となく皆さん方が知っているような幼稚園と大差ないです。ああいうことをやっているということなんんですけど、多少違うのは、実は、今のようなことを、例えば、トンボを集めるというのは去年、やたらはやった

時期があるんですけど、飛んでいるのを捕まえたり、トンボは割と寿命が短い、死んで下に落ちるんですけど、それを昆虫採集みたいにして標本というか、ただ並べるんです。特に年長さんになると、図鑑を調べて、何だろうとか、最近は、パソコンが置いてありますので、それで検索します。チョウチョウとかトンボの動画が出てくると、動きで『〇〇トンボ』というのが分かるので便利らしいです。あと、生きて捕まえられるやつは大抵飼いたいと言いますので、ダンゴムシとか、バッタとか、コオロギとか飼えますけど、この年はトンボを飼うとなって、割と大きな網を先生がつくってあげて、2メートル、高さはこのくらいかな、そこにトンボを置いて、トンボは何を食べるかなと調べて、数日は生きているんですけども、みたいなことです。

そういうようなことは、どういう意味があるんだろうということを先生方と、先ほど言ったように年に数回通うたびに議論していて、子どもたちがいろんなものを好きになるということを大事にしたいと幼稚園の先生方が言っているわけです。

そうだよね。じゃ、その好きになるということから保育を進めていくということは、要するにどういうことなんだろうというのを私のほうで理屈として考えたわけです。

私が関わった3月に出した本を持っている方は、その後書きに、編者は3人おりますけど、一人の岸野さんが書いています。2021年かそこらに、福井の附属幼稚園で内輪のシンポジウムをやったわけです。そのときに僕が、好きになっていくという話は大事ですよねという話をしたときに、それは「愛ということです」と言ったわけですが、そうしたら聞いている皆さんには、後で、みんなが顔を合わせて、無藤先生、どうしたんだろう。ついに愛という言葉を口走って、大丈夫かという反応だったんです。

いまだに、愛と知という話をすると、そういう反応が半分くらいの人の顔に浮かぶ。あの人、大丈夫かと。年取ってもうろくしているんじゃないかといって、思うんですが、年寄りがどうしたって最近、平気で私が言うのは、自分がそうだからで、年寄りを差別するんじゃないなくて、自分を言っている。

なんですけど、そういうふうに戸惑うのは、それはそうです。保育界で愛という言い方は余りしないんですけど、ここではつきりさせてほしいことは、私が愛と言っているのは、子どもが周りのものを愛するということです。保育者や親が子どもを愛するという話をしているわけではないんです。それは、保育者も親も子どもを愛するでしょうけど、そういう当たり前のことと言っているわけではない。親が子どもを愛するようになるために園があるわけではないです。最初から親は子どもを愛しているんです。そこにいろんな問題は

あるでしょうけど、それは園も同じように。そうじゃなくて、幼児教育というもの——私は幼児教育とか保育とか、同じ言葉として使います。それから、今日は乳児保育のフォーラムだそうですけど、私は、幼児と呼んだり、乳児と呼んだり、乳幼児と呼んだり、子どもと呼んだりしますが、私は基本的に区別しないので、小学校に行く前の全ての子どもは幼児であり、乳幼児ですとしていますんで、幼児と呼んだときに3歳児を指すんですかと面倒くさいことはしません（笑声）。どうでもいいんです。

とにかく、子どものほうが、周りの人だけじゃなくて、周りのものを愛するということを大事にすることが幼児教育の使命と考えるようになったわけです。人だけではなくて、物です。さっき出てきたチョウチョウやダンゴムシ、もちろんそうです。そういう生き物もあるし、今日の写真には出さなかったけど、先日伺ったときは、やたらチョウのさなぎがたくさん出てきて、集めて、ちょっと潰すということをやったり、植物とか、やたら石を集めることでもいいし、別に集めなくても、砂場に行って砂で遊んだり、水を入れたりすること。要するに、子どもが出会う全てです。子どもが出会う全てだから、それを世界と言っているんですけど、それをどういうものが好きになるということ。それは幼児教育において、園という場をつくって、幼児教育を進めてというときに、それが一番大事な使命というのが私の主張です。

私の主張ですけど、根拠はちゃんとある。世界の愛という言い方をするかどうかは別として、どこに根拠があるのか。そもそもフレーベルはそういうことを言っているんです。ちょっと言い方は違う。倉橋惣三先生も、そういうことを言っているわけです。

だから、私は変な主張をしているわけじゃなくて、幼児教育というのがフレーベルの1840年くらいを起点としたら、180年くらいですけれども、その歴史を脈々と流れている幼児教育の思想というものを取り出せば、それが世界への愛なんです。子どもが世界を愛することを育てるということが幼児教育の使命とするということなんです。

そういう言い方は、要領でも指針でも書いていませんけれども、愛という言葉を使っていないです。しかし、私は、特に幼稚園教育要領の改訂に携わったせいもありますけれども、切りなく読んでいますが。年間100回以上読んでいるに違いない。何千回とかだんだん分からなくなって、回数はどうでもいいんですけど、戦後の全ての要領ですね。

それはどうでもいいんですけど、そこの底流というか、中核にあるのがこういう思想なんだよと言っているので、私は、幼児教育というのは理想的な在り方を言いたいんじゃないんです。そうじゃなくて、皆さん方が、それぞれの園でやっていることのシーンという

か、核というか、底というか、そこにあるのは、もっとちゃんと言えば、子どもたちが世界を愛するようになっていく。その過程を援助しているんだよ。そうじゃないと思うなら、よく見直してください。子どもたちの周りのものを日々遊びながら好きになっていって、その好きというのは、入園から一年一年たっていって、卒園ごろにいろいろなものが広がっていきます。という、ある意味で簡単なことを言っているわけです。

それで話が済むと話が5分で終わるんですけど、分かる人は5分で分かっていいんですが、実は簡単な結論に私が到達するのに、毎日考えながらこの数年メモを書いてきたんです。2021年くらいからです。2021年というのは、私が退職していたんです。同時にコロナで行くところもないで、そういうことをやっていたんですけど、今は2025年です。4年ほど毎日のようにあれこれ考えたり、メモしたりしてきたんですけど、大体言えるところまで言えてきたのは9割くらいかなという気はします。5分で済む話を、どうしてそう長いものになるのか。練っているんですけれど。

というわけで、まず3月に共著にして、この2025年12月に単著が出来ます。

じゃ、どうしていろいろややこしい話に変わっていくかということで、私の資料です。私は自分で考えたことを文章にして、それを読んでもらうのが好きなので、別にしゃべらなくても読んでくれればいいんですけど、読んでくれればいいよと言って、読んでくれる人はいないので（笑）、ちょっと案内。

じゃ、なに？ということです。10項目ほどに理屈を整理しました。好きになるということなんだけれど、愛すると言い換えたわけだけれど、最近は、「にもかかわらず愛する」というふうに、「にもかかわらず」をつけて考えようというところにきました。どうしてかというと、世界を愛するとか言うけど、世界って地球上のあらゆるものです。

今朝のNHKのニュースを見ながら、ニュースだってろくなことは出ないですけど、にしても、この世界って愛するほどのものかなというか、嫌なことばかりなわけですよね。嫌というどころか、悲惨なことがたくさんあるんです。しかしながら、そうであっても肯定する。肯定するから我々は生きる。他の人を助けるんだ、共に何とかやっていこうとするわけです。特に小さい子どもというのは、その「にもかかわらず愛する」ということを真に感じてほしい。幼児といえども、朝来て帰るまで、平和で、ハッピーで、にこやかで、うれしくて、何となくなって、ここで泣いたり、わめいたり、つまらなかつたり、けんかしたり、元気がなくなったりしていますね。

でも、なんか楽しいことがある。それは単に悲しいことや嫌なこと4割、楽しいこと6

割じゃなくて、そういう嫌なことを含めたトータルの全体は肯定できるんだ、楽しいんだと思う感覚が、幼児期こそ育つ時期なんじゃないか。それは幼児の体がそうできている。あるいは、友達と出会うことがそうなっている。あるいは、幼児が遊びたがる、そこにその楽しさが組み込まれている。

昔、親が亡くなったときに、葬儀の後、みんなで来てくれた方とお寿司を食べたりするじゃないですか。亡くなった側としては複雑な気持ちなんだけど、あのときに本当につくづく思ったけど、悲しくたっておなかがすくんだなと。その日に食欲いっぱいではないです。それはそうだけど、腹はすくなど。腹すいて、大して食う気もしないんだけど、まあでもおいしいものとか、人間はそうなっているんで、そうなっているのはいい具合だなと思いました。幼児だって、泣いたカラスがすぐ笑うというけど、本当にそうです。そうであることは本当に幼児にとって幸いだし、人類にとって幸いです。大人になってくると、やはり落ち込んで鬱になったりするでしょう。幼児は多分鬱にはならない。元気がなくなることはありますけど、まあ1時間も続かない。トラブルがあるたびに落ち込んで、給食要らないとかなっていた日にはやっていられないという感じです。だから、そこがやはり育とうとする力が、生命力があふれていますね。だとしたら、そういう子どもが持っている生命力をいかに出しながら、ある形のところに持っていくか。これが幼児教育のはずです。

ということで、まず「愛と知の循環」というふうな言い方にします。

さっきの福井の例で、もうちょっとちゃんと用意しておけばよかったですけど、例えば、さっきの写真はその都度のしか出ていないんですが、さっきのアリを探す子たち。そうすると、たまたまアリが歩いているわけですけど、アリが列をなしますね。どこに行くんだよ。そうすると、穴がある。アリの巣がある。ほかにもあるかもしれない。アリの巣は1つ空いていると、どこかにまた空いているんです。それで、いろいろ探せば、ここにもある。中に餌を運ぶわけです。そうやって興味がどんどん広がっていって、このアリの名前とか、種類は何だろうというふうにどんどん広がっていくと1週間くらい活動が続いているわけです。

去年だったか、一番すごいなと思ったのは、キノコを発見した子がいて、広い庭で、割と手入れをしていないというか、雑草が多くしてあるんですけど、そうすると木陰みたいなところがあるんで、キノコを見つけたんです。「これ、なんだ」「それ、キノコだよ」。キノコ図鑑を見たらあるんです。幼児向けの素朴なものもあるし、大人向けもある。あと、

ネットでやると、やたらめった〇〇キノコが出てくるんです。そういうものを見つけて、ほかにあるかもしれないを探すんですけど、大人たちはキノコは知っていますが、大して気にしていないし、キノコはどちらかというと邪魔だなという感じなんだけど、まあ興味を持って。そうしたら、最終的に17種類だか見つけたんです。ちょうど梅雨の5月、6月くらいです。雨が降るなかで、それを一々写真に撮って、描いているのは大体図鑑を写しているだけですけど、それに自分が模写したのを、もちろん新たに描いていまして、キノコ図鑑というものをつくったわけです、その子がね。別に、紙にそれを張って、そういうものにしていく。そういう意味では、その年はなぜか図鑑づくりがはやって、キノコ図鑑とか、〇〇図鑑とか、自分たちで実際やっているんです。

翌年はキノコ探しになったんですけど、先生たちが、せつかくだからってシイタケの原木をどこかから手に入れてちゃんとやる。食べられるんですね。

ともあれ、そうやって、好き、面白そうだな、好きになるということと、調べたり描いたりすることはセットで進行していくので、最初は興味を持って、何だろう、不思議だなと思って入ってくるんだけど、それは一体、名前も分からない。どういうものか、どういう性質なのというものが加わっていきながら、進んでいくから、それを「愛と知の循環」と呼んでいるわけです。

ポイントは、いろいろなことを調べるということは大事なんだけど、それが好きという動機によって動いていく。だから、好きになっていくことと知ることがセット。ただ、何となく面白いなというだけだと、漠然とキノコがあるだけだけど、そうやって自分で描き写すと特徴が見えてくるんです。そうすると、これとあれは違うみたいなことが出てくるんです。

それほどキノコは生えない時期の、別なときには雄しべ、雌しべを見つけたわけでして、それを一々描き写すんですが、雄しべ、雌しべはやたら花によって違うんです。花粉がついているんですけどね。見つけて、そのときに、好きということが動いていく中で、知るということがどんどん出てくるよねということです。

人によっては知ることが邪魔するという意見もあるんだけど、子どもたち、少なくとも福井のずっと見ている子どもたちは、知ることがさらに好きになることを支えていく。逆に言えば、名前がないものは何とか名前を見つけて、特にキノコとか、科学的な図解があるものというか、正確なものがあるのを知っていますので、それを見つけていく。もちろんよく分からないものは好きな名前をつけますけどね。石なんかは〇〇石とか△△石。

けど、それを、先ほど言ったように、みんなの時間を通して見せ合ったり説明することで、1人、2人の発見が、みんなの発見に変わっていくんです。そういうのがあるから、私もやってみようとか、○○ちゃんがキノコをやるなら、私はこっちを。図鑑で格好いいからダンゴムシ図鑑をつくるとか、探すのは余り共同とならないんですけど、物をつくっている場合がありますが、そういうときに、「じゃ、一緒につくろう」というふうにしているんです。

そういうことが可能になっているのは、園の空間が重要な意味を持っているということなんです。物を探していったり、見つけたりできるのは、そこに塀とか柵があって、こっち側は子どもたちが勝手に使っていい空間にしてあげる。そして、そこにあるものは、どれも子どもが取っていいものにしてあげます。取っちゃいけなかくて触っちゃいけないものとか、先生が使うべきものはちゃんと分かるように職員室の中にある。保育室にある全て、また、園庭にある全ては子どもが触っていいようにしてある。触っちゃいけないもの、危ないものはもう見せない。

ですから、例えば、この幼稚園に色水遊び用の中庭があるんですけど、というか、中庭があつたものを色水用に変えたんですが、そこはプランターが10種類以上、が一つと周りに置いておいて、春から秋の終わりくらいまでいろんな花が咲くように先生たちが手入れでいろいろしてあって、そこでの花びらは子どもが自由に摘んでいいことにしているんです。幾ら取ってもいい。そうすると、花びらを取って色水遊びする子たち、テーブルがあるんです。持ってきてやるんだけど、やたらめったら取らない。

あるとき、そこは4歳児が主なんですけど、3歳児が来て「やりたい」というんで、4歳児が「花を取ってやっていいけど、3枚までね」と。4歳児は3枚とか気にしないですよ。3歳に分かりやすい言い方にしたんだと思いますけど、要するに必要なものを取つていいことにしているということです。ですから、この附属幼稚園には観賞用のものは一切ないです。なんだったら幾らでも取っていいんです。

というふうに、色水遊び用に中庭を10年くらい前にある程度改装してつくっています。つまり、園の空間は子どもが遊ぶためにある。そうすると、そこにあるものは全て子どもが触つていいもの。あるいは、そこにあるものを使うときに、先生の許可は要らないというふうにするんです。これは当たり前だと私は思うんだけど、案外そうでもなくて、「先生、これ使っていいの?」とか指示を聞くケースがあるんですが、使っていいと聞くのはなしにする。あるいは、使っていいと聞かないと使えない危ないものや貴重なものはしま

い込んじやうというふうにしようよということでやってきたわけです。

そういうところから、園の空間デザイン、つまり子どもにとっての園という空間をつくっていく。私は、このような園の空間をつくったということが、実はフレーベルの最大の発明だと思うんです。フレーベルのキンダーガルテンの正確な設計図を持っていないんですけど、ざつと言えば、有名な恩物のような積み木などとともに、園庭がある。つまり、幼児だけで活動できる空間をつくるという発想です。これが、そういうものがどうなる、幼稚園というものが当たり前だから不思議に思わないでしようけども、やはりこれは世界的な発明なんです。

その前は、子どもはそこら辺で遊んでいい。園から離れて家庭に帰ったときにはそこら辺で遊べた方がいいと思うんだけど、子どもたちだけで遊べる空間を数時間、子どもたちに提供することが必要なことです。

東京だと保育園なんか園庭じゃなくて公園で遊んでいるというのが結構あるんですけど、それは運動遊びなどができるってそれはそれでいいんですけど、保育園のほうが遊ぶのは、午前中の10時から11時過ぎくらい。というのは、そういうときには、さすがに小さい赤ちゃんと親とかは遠慮してこない。保育園とかで遊びに来るんですけど、例えば、保育園の子が花壇にある花びらを摘んだら怒られるんですよね。もめる。花壇なら分かるけど、タンポポが咲いていて、タンポポを摘んでも怒られると、それはいいんじゃないかなと思うんだけど、怒る側にしてみると、私はあのタンポポを楽しみに赤ちゃんを連れてきている。そうなのかという感じですけど、東京のせせこましさを象徴していますが、そういうことがないんだよ。庭で遊んでいても監督はしなきやいけないんだけど、さすがに、どこかから変な人がやってきて、子どもをさらったりはしないで、それは大事な空間だと思うんです。

そういうところで、だからこそ、遊びが循環している。要するに、同じ遊びを繰り返している。積み木遊びをした。それは、片づけたとしても、また翌日も積み木遊びができるというふうに、何度も同じような遊びを繰り返していく、どこかの遊園地は楽しいでしょうけども、あれは1回きりのスペシャルな体験です。だけど、園のほうは、ほぼ毎日同じようなものがある代わりに、それを毎日使ってもいい。それによって、同じ遊びを繰り返しながら、そこに新たな発想を組み入れて循環していく、発展していく。これが特徴です。そのための素材をたくさん用意しているということです。

そうすると、そのように何度も繰り返していくからこそ、そこにある種の学びが起こ

るんだと思います。最近、文科省が啓発動画をつくって、今年の2月か3月か4月だったか、文科省サイトにあるんですけど、遊びは遊び、遊びは遊び、短いものですが、そうなんだけど、遊びが遊びに転じるということには相当繰り返していかなきやいけないと思います。1回ちょっとやったくらいじゃぴんとこないわけです。様々な関わり方を何度も何度もやっているから身につくわけです。

その繰り返しというものの大しさ。繰り返されるから、何かに気づいたり、そこで工夫も生まれてくるということで、そういう何度も何度も体験し、繰り返していくことを知の培養。知的なものがゆっくり生まれ育っていくところといいますか、ということです。

そういうことを通して、子どもの主体的な在り方。最近それをエイジェンシーと呼んだりしますけれど、それがしっかりとしたものとして育っていく。子どもは最初から主体的ではあるんですけど、具体的に関わるんだけど、この主体的な在り方が明確になっていく、子ども自身が。というのが幼児期のありよう。それに向けて、私が言うところの愛と知の循環を通して、周りの環境を知っていくということが数年間展開されていくということです。

そして、9番のところで、子どもたちが関わっているところは園の環境なんです。保育室にあるツールとか、絵本とか、庭にある草とか、花とか、土と水なんです。そういうものに関わっていくのは、園の中の環境を知ることなんんですけど、次第にそれが外の世界に広がっていく。外の世界で起きているであろうことと、つながりを持つように変わっていくわけです。

よくある例で言うと、年長さんが電車をつくる。単なる電車ごっこ。そのときに、新幹線のはやぶさとか、東京の子どもは東北新幹線が好きです。東海道新幹線は余り人気がない。色ですね。東北新幹線の特急の色が華やかなんんですけど、それはそれでいいんですが、そういうものをつくるんだけど、年長さんくらいになると、だんだんマニアックになってくるんです。非常にリアルになる。自分で見たことがある子もいるし、幾らでも写真や本があったり、今も電車動画はやたら出ています。本当に大人のマニアの人が提供して、ただ電車が写っているものです。そういうものを持っているから、ほとんどの。

いつだったか、白梅学園大学附属幼稚園でやっていたのは、年長の子どもたちが主ですけど、電車ごっこを、このくらいの電車です。木と段ボール。そのときに、電車の、新幹線の接続部分です。東北新幹線というのは、仙台一青森ですと、途中で福島から山形新幹線、盛岡から秋田新幹線というのがある。2つが違っているわけです。接続ががちゃつ

と止まる部分があるんです。それは東京行きとか、福島行くときに見えますけれども、それをこだわる子たちがいて、ここはこういうふうに、そこをついたり離れたりして、段ボールでできないんですけど、それを何とか強くして、強固にして、曲がる形にして、ぐつと入るようにしてというのを1時間かけてやっているんです。そうやっていくということは、もう園の中の環境への関わりが、今度は外の世界に実際に起きていることとのつながりの中でやるようになります。

それはもちろんいろいろなところに出てくることによって、ごっこ遊びをしていても、家庭の生活や園の生活、地域の生活。例えば、商店街に行ってパン屋さんの様子を見せてもらって、前もって打ち合わせがあるんですけど、パン屋さんの中のつくっている工房というか、それを数名見せてもらってとやって、幼稚園の打合せ後ですから、見られる。

それを行うんですけど、その後に園の中でパン屋さんごっこ、お店屋さんごっこですけど、そのときにただ適当に丸めるんじゃなくて、粘土のほうをもうちょっとやって、色をつけて、パンにして、箱をつくって、そこで焼いてということにしてというふうに、リアルなごっこ遊びになっていくんです。

そういうことはよくあると思うんですけど、それはつまり子どもたちが園の環境に出会ったものが、もっと外の世界につながっていくんだよということがだんだん分かっていく。それがまさに小学校、それ以降の学校、生活へのある種の準備にもなっている。というふうに言えます。

そういう中で、いろいろなものに出会う。最初に言ったように、「にもかかわらず世界を愛する」。世界というのは、分からぬことはたくさんあっても、面白いんだよ。今、分からぬことはあるけど、どこかでいろいろやれば分かっていくんだよ。調べれば何とかなるんだよ。分からぬんだけど、調べる過程、楽しいよね。自分でそれを何とか調べることがいいので、いきなり答えをくれてもつまらないから、先生に「ちょっと待って、調べるから」みたいな説明が生まれてくれれば、それはまさに小学校で生かすべき学びの姿勢だと思うんですけど、それが園で育っていけば、小学校はもっと充実したものになっていく。それに向けて園の活動が展開するといいなというのが私の話です。

では、次に行きます。当たり前なんですが、話は重なるんですが、まず、生成のペタゴジーということです。別に格好よく片仮名を使わなくてもいいんですけど、ペタゴジーというのは教育学という意味ですが、教え方、指導の仕方みたいな意味です。そこに生成とついているのは何かというと、保育というものは、子どもたちがいろいろな活動を開

始する場所なんです。そして、子どもたち自身がいろんなことを思いついて、何かを始めて、それを保育者が手助けしながら、共になってもっと豊かな活動へと転換していく。だから、子どもたちが思いつく場をどうつくっていくか。環境構成ということです。そして、子どもたちが何か面白そうなことを始めたときに、それをどういうふうに手助けするかということ。この2つのポイントを押されたものが、保育者が援助することとして必要だよ。それを難しく生成のペタゴジーと言っているんですけど、逆に言えば、こういうふうにすれば大丈夫。この教材を使えば何とかなるんだよ。そういうもんじゃないとか、積み木というのをこういうものなんだから、こういう使い方をしなさいというものでもない。使い方を決めるのは子ども自身だから、子どもの活動の都合でいろんなことに発展しうるんで、それはそれでいいということです。

花びらを摘んで色水遊びのときに、ある程度道具が要る、用意として。100円ショップで買ってくるんですけど、こういう小さなプラスチックか何かの器、こういう小さいすり鉢を売っているんですけど、すり鉢のボールとか、ペットボトルは使い捨てですが、そういうものを置いておいて、最初、始めるときに多少教えました。花びらをこうこうこうとか、潰すと色っぽいものが出てくるでしょう。そして、水を入れるとみたいなことをちょっとだけ教える。でも、ある程度進むと、さっき言ったように、4歳児が展開するところに3歳児が入ってくれれば、3歳児はそんなに上手にできないから、ああいう感じというのを伝わってくるから、今ではある種の伝統ということでもないんでしょうが、分かんないから、できることを教えてくれますから。だから、多少の援助や道具は必要で、設定が必要なんんですけど。

だけど、そこからもっと発展させようというのは年によってなんです。年中担任が「いろいろ色水が出ていいか、これで」というときもありますし、出た色水を移してジュース屋さんにしてとか。別に先生が決めるというより、たまたま子どもが始めたものをもっと盛り立てていこうという感じです。あとは、こんなものを窓際に置いて、光が差してくるとカラフルな影がこっちに写るんですが、こっち側に白い布を準備して、すごくきれいなんんですけど、そのときは、置いておいたら一人の子が「あっ」と言って色のついた影がある。先生が、白い布を置いてあげて、見ていたら「おおっ」となったんです。子どもにとって、影は黒いもので、こんなにも、影が色づくって余り分かっていないんですけど、例えば、そういうこととか。あと、布を持ってきて染めたりしたことがあるんですが、これがなかなかうまくいかなくて、先生が指導して染めれば、見せて、なるほどとなるんだ

けど、私が見ていると、何となく盛り上がりに欠けて、染物が子どものものになっていないな、どうしたらしいんだろうなというのはちょっと未解決ですが。ともあれ、そのように生成していくことを大事にしていこうということになります。

2番目に申し上げたいのは、先ほど、幼児期を通して次第にエイジエンシーが發揮されていくといいまして、愛と知の循環を通してエイジエンシーが育っていくというときに、そのエイジエンシーというのは根本的には1つ主体だと思っているけど、多少分けておくほうが便利というか、実際問題として方向が違うということで、とりあえず5つに分けてみたんです。

1番目は『知的な主体』。物事を知的に考える、学ぶという思考です。図鑑を調べるなど典型的です。

次は『情動的』。まさに愛する、喜怒哀楽なんですけど。かわいいなとか、いいなとか、格好いいな、そのような感情が表に出る。そのときに、私がうれしい。そして、その周りの世界がうれしく輝いてくれているという感覚、感性です。それをしっかりと育てていこうということです。だから、ここで感情というのは感性というか、例えば、こういうお花を見て、黄色の花が分からぬ。名前を聞く。きれいだなという感覚です。というものをどう伝えていくか。花の形の面白さや美しさを子どもにどう伝えていくか、どう幼児が出会ってくれるかというのは、先ほど、花びら、雄しべ、雌しべの話をしたように、なかなか難しいなといつも思っています。こういうふうに飾っておいて、おお、きれいだな、そういう季節だなと感じるのは大人側なんです。子どもは、ちらっと見て大体無視するんだね。玄関に……。どうしてかと、よく考えたら、子どもの感情との出会いなんだから、子どもが花を見つけるという、そこからいかないとダメだよね。

例えば、チューリップの球根を植えるのは秋にやるじゃないですか。やることが多いでしょう。10月とか11月。そうすると、大体2月、大阪も東京と同じくらい2月、遅くとも3月です。今年は2月も暖かくて、2月の始め頃に東京とか行ったらもうチューリップが出始めました。年中組の一人の子がお集まりの時間にチューリップが出ていて、報告しています。それでほかの子どももみなで、「えっ？」と見に行って、「ああ、そうだよね」。担任の先生がすごくいいことを言って、「じゃ、これから毎日写真を撮って飾っておこう」。写真を撮っておくというのは割と大事で、チューリップを栽培したことがあればすぐ分かると思う。何日かくらいで芽が伸びてくるとだんだん色が見えるんですよね。そこら辺で、要するに花として咲く前に見える、芽の中に見えてくる。そのあたりが一番伸

びてくる。「おおっ」となるんです。完成しちゃうと、きれいだけど、さほどじゃない。だから、逆に言えば、そのプロセスを経ないでチューリップをたくさん見せても大したことがないです。「へえー。だって、僕、この間、ユニバーサルジャパンに行って、あれ、きれいだったと思う」とか、そりやそうだよね。ディズニーランドのほうがきれいだという話。パレードは華やか。そりやそうだよね。それは経過という生成のプロセスを知らなきや、それはそうなんです。だから、結果として色鮮やかではなくて、そこから色に初めて、白黒に近いものから色が見えるという、その瞬間で感動しているんです。それは子どもも感動するわけです。そういう場を育てていくこと、感じるような主体です。

だから、『想像的主体』というのは、要するにイマジネーションです。いろいろなです。いろいろなものになりますね。自分はお母さんになったり、スーパーヒーローになったり、ショッちゅういろんなものになれるでしょう。あれは相当意味があることだと思います。想像することによって、身の回りの現実を超えた可能性を知るわけで、現実を超えた可能性は、実は本當にあることかもしれないし、空想の世界かもしれないです。ぐりとぐらの世界は空想なんです。でも、ロケットが飛んですごいなというときに、実際に宇宙空間に衛星が飛んで、そこに宇宙人が暮らしているのは空想じゃなくて本當ですよね。だから、イマジネーションというのは様々なところに展開して、そのイマジネーションを本当に發揮するのは2歳から幼児、小学校の始め頃です。だから、相当大事なことなんです。

4番目は『社会的協同的主体』。要するに人と一緒にする。友達、仲よしとすることもある。一人ですることもあるし、仲よしとすることもあるけれど、グループです。それから、クラスが20人いたら、20人でやってみて面白いことをする。20人でやって面白い。例えば、ドッヂボールとか、だるまさんが転んだ。ある程度の人数のほうが面白いというものはいろいろあるんです。その両方が楽しいということの話。

5番目に加えたのは『道徳的主体』というんですけど、この間から考えていて難しいなと思いながらですが、この間というは何の問題かというと、園で虫を飼っていて、カマキリ対コオロギ問題というやつですが、皆さん方も出会ったことがあるかもしれない。園で虫を飼っている。小学校の生活科なんかで飼っていると思いますけど、庭で見つけたいろんな虫、ダンゴムシとか何か。その中にカマキリを捕まえて、カマキリを飼っているカマキリグループがいて、こっちにコオロギを捕まえて、コオロギグループがいて、いいんですけど、それぞれが餌を探しに行く。私が見たのは、草つ原が、庭がこのくらい草が伸びて、広いんですけど、そこに割と虫がいるんです。餌を探します。

問題はカマキリなんです。カマキリは、生の動物を食べるんです。肉食といいますか。それで、カマキリグループがコオロギを捕まえる。餌なんです。コオロギグループは怒つて、「私たちが飼っているものを殺すんだ」。カマキリ側は「これ、餌だもん。しようがないじゃん」と。そりやそうですよね。言い合っていて、先生も来て、先生としても解決ができない。「そうだね」「どうしたらしいかな」「ううん」とうなっている。そのうち、「まあしゃあないや」と言って、解決は無いんですけど、コオロギグループは「うちのコオロギは大丈夫だからいいか」みたいな（笑声）。いいかげんんですけど、そういうAかBかどっちも正しいしなということが、まさに本来の道徳として考えることだなど、この間つくづく思って帰ってきました。

そのような主体で成り立っていくときに、愛と知の循環がもたらすことですけど、愛と知の循環が動いていくときに肝心なのは、子どもがそこで遊ぶということです。遊ぶということは何か。小さい子どもが遊ぶというのは何をすることなのかということについても、昔から諸説あるんですけど、この20年くらいの研究で随分分かってきたことがあります、それを私なりに整理したんです。それを「遊び性理論」と私は名づけて、「性」をつけています。

どういうことかというと、私は、遊びということと、遊びでないことを分けるものではない。遊びと生活、遊びと仕事を分けるのは大人の発想であり、小学校から入ってくる発想なんです。幼児期においては、全てはある意味で遊び、ある意味で生活であるものです。だから、遊び性というので、その遊び性はどんな活動においても多少はあるということが大事だと思うんです。

だから、すごく真面目な活動にも遊び性ってちょっと出てくるわけで、例えば、皆さん方の園でするかは知らないけれど、4歳、5歳くらいになると、椅子を並べて円にして、みんなが座ってそろう。そのそろうのに、まだあっちにいるとか、トイレへ行ったり、待っていたりして、それでこうやると座りますよね。座るんだけど、3、4歳だと先に座っちゃった子、○○ちゃんと隣じゃないと嫌だとか、もめてとか、一人でトイレにちょっと立った隙にばっと入ってけんかする。まあありがちだけど、5歳くらいになれば割とすっと座るんです。それで5分くらい待っています。そのときに、仲よしがこっちと向こうに分かれているときに、見ていると、ちゃんといい子で座っているんだけど、そういう子たちに「うん」とかいって（手を小さく振る）何か合図して遊んでいるわけです。ちょっと変な顔をして笑わせるんだけど、相手もわっとは笑わない。「うん」という顔で笑う。そ

いうものを遊び性なんです。

でも、その遊びの度合いが、いかにも遊びというものがあるわけで、それは2つのフェーズ、2つの面でできるということが重要だと思うんです。1つは、その場でとにかく、思わずちらっとやってしまうことをやっていい。手が動いちゃう。思いついてやる。何でもいいんだけど、とにかくやりたくなったらやるんだ。手が動いたらやるんだというふうに勝手にやってみるということが遊びとして一番楽しいこと。足を踏んで音を出したきや出してみる。意味はないんですけど、出してみる。音がしたら、またやってみる。爪先立つ。幼児は爪先立ったりしますけど、何の意味もないわけです。体操の選手でもないし、でも、できそうだったらやってみる。そういうふうに、一々変なことをしたり、変な顔をしたり、ちょっと無駄なことをやったりする。だけど、実はそれが非常に大きく、長く言えば、物事の可能性を見つけるという意味で重要なことじゃないかということです。片足立ちするということは片足で立てる可能性があるということだし、足でどんどんやれば、あっ、音が出る。そっとやれば小さな音が出るとか、足の動かし方で音は変わるんだということを見つけるわけだから、そこで見つけたものが何かにすぐ役立つわけではないんだけども、いろいろな物事の可能性を知っていくわけですね。それが重要なんだということが第1。

2番目は、そういうふうに遊んでいる、いろいろなことをやっているうちに、ふと何かを目指すことができる。例えば、積み木を積んでいるときに、いいかげんに積むと崩れますよね。それでやって崩れているうちに、ふと子どもの手が止まって上を見上げて、今度は割ときちんと積んで、そうすると高くなって、多分、高く積むのは、と思うんです。つまり、それが勝手にいろんなことをやっている中で、突然、こういうこともできそうだという、それを仮の目標としているんですけど、高いところまで、背の高さまで積めるんじゃないかなというのでやってみて、積んでいく。もちろん中には天井まで積もうとして始めて、ちょっと無理だとしてやめて、違うことをするとか、三角にしようとして、やっぱり無理で、違う形にする。誰かが命令したのと違うんだから、幾らでも変えられるので変えますけど、そういう目標が生まれると工夫が生まれるんですね。

資質・能力の思考力というのも、考えて工夫するというものです。工夫というのは、目標があるから工夫なんです。あることを目指すためにどうするか。高く積むために、積み木をほぼ、物理学的な言い方をすれば、上の積み木の重心を真ん中に置くということ、ほぼ同じような位置に置くことで積めますよね。

ということなので、遊びというのは、それ自体楽しいことなんだけど、同時に、物事

の可能性を知ることになる。目標に向けての手立てをより工夫することということに長い目で見てつながっていくということです。

だから、園の環境の中で子どもたちの教育、主体的な活動というものが、遊びを通して成り立っていく、そこの遊びを通して資質・能力も育ちというのが備わっていく。そして、それがまさに小学校の学びの基盤になるとを考えているわけです。

そして、先ほど5つの主体性ということを言いましたけれども、5つの主体性がいきなり成り立つわけではなくて、大事なことは、さっきから言われている愛と知の循環、物事を好きになる。その好きになった物事をもっと詳しく知りたくなった。詳しく知れたらもっと面白くなる。こういう面もある。好きであることの複雑さということ。最初は変なキノコだなと思ってやっているうちに、キノコをたたくと粉が出る。面白い、胞子ですけど、というので、粉の出るキノコとなる。目標は変わるんだけど、キノコの知的関わりが広まるんです。

そのように、愛と知の循環と呼んでいるものが、展開することを通して物事がより深く、そして広く知っていきながら、次第に、そこにそれをする「私」、「自分」というものが明確化されていくと、それが主体的というふうになるということを申し上げます。

そのときに、先ほど園の空間、園という空間、そこで生まれたものが園の環境であるということ。別な言い方をすれば、それは園における生活ですよね。生活における空間だと思うんですが、そうすると、園の生活の中でいろんなことを使って遊び、学んでいくわけだけど、それが園の外へと学びが広がっていくんです。そこをどう捉えたらいいかは、最近考えている問題なので、余りまだうまく展開できませんけれども、子どもが、例えば、さっき言いましたが、商店街にお散歩に行って、お店屋さんをのぞくとか、近くの公園に行くとか、科学博物館、サイエンスミュージアム、割と地方に多いんですが、行くとか、いろいろ子どもが実際に外に行く場合もあります。それから、農村にある保育園に行ったときに、広い園ですけれども、農村地域なので、保護者、厳密に言うと保護者の親、祖父母ですが、おばあちゃんが「うちで取れたものなんです」と持ってくるんです。トウモロコシ取れたよとか。それを持ってきたら、すぐ園の人たち、先生が、じゃ、年長さんでふかして食べようかみたいにして、ぱっと鍋を用意してやっているんですけど、そういうのが、まさに地域の側から物がやってくることです。

だから、園の生活というのは、最初のほうで言いましたけど、空間として、ある程度閉じて独立しているからこそ、子どもはそこで遊べるんだけど、同時に、外からのやり取

り。いろんな形でやってくる。考えたら自然というのももそうですね。風が吹いてくるし、雨が降ってくるし、それは外からやってくるだろうし。そういうことを私は「通路」とする。園から地域に広がりはそういう通路がいくつも走っていて、そこに移動する場がある。散歩するとか、送り迎えもそうですけれども、そこをどういうふうに生かしていくか。そして、園で子どもたちが学んだことを、どう地域に出していくか。その地域の中には小学校も入ってくるんです。そういうことをどう考えていくかが必要で、園と外の間が幾つも通路、ルートをどうつくっていくか。小学校というコンビを組んで、授業で——これが難しいのは、地域といつても、場所によって実態は様々ですので、そのどこかでやったことが、その扱いを決めていくわけです。

最後に2つ指摘しておりますけれども、幾つもの増幅装置の集まりとしての園の保育の在り方。増幅装置をやっているのは、子どもが何回も興味を持って遊び始めます。

そこをある程度、園の環境をつくる、そこで、生まれてくるんですけど、そこも気にしちゃうと、保育として割と難しいのは、その次の実現可能かです。子どもが何か始めたときに、それをどのように発展させるか。というものをどこまで。先ほどの図鑑づくりも先生が段取りをつくって、このようにしてというふうにしたらつまらなくなるし、子どもの身にならないけど、子どもに任せたら図鑑にはならないですね。だから、そこのあんばいがすごく難しいんですけど、子どもたちと保育者がともになり環境を再構成する。その増幅、広げるという意味ですけど、の工夫というのが実は保育として相当重要で、遊びでいろんなことを思いつくんだけど、それをどういうふうに発展するか、持続させるかという工夫です。そこら辺をぜひ考えてほしいというのが一つです。

最後に申し上げたいのは、保育は徐々に変わることで、いろいろ実践が共鳴して積み上がっていくんだけよという話です。保育・教育の実践はいわば千もの要素があって、それがばらばらに動いていますよということです。そうすると、そこを変えていくときに、私のような大学にいる助言者が、あるいは指導要領、保育指針を変えたりしますけど、有名な実践者が語る。あるいは、今般のような機会に。だけど、皆さん方も学ぶわけだけども、園の中では多数の、無数の要素があるということ。何か一つで突然それがよくなったりしそうにない。だから、何か入れると突然よくなるということは余りない。レッジョ・エミリアに行って感動して、取り入れたから、来年から私たちの保育はすごいですということはないです。そこで大抵何が起こるかというと、形をまねするだけで、今までいた先生方がぶつぶつ陰で、何だよ、園長、新しいことをすぐ入れて。私たち、ちゃんとやつ

ているみたいな感じになって。

そこで、園長がもっと頑張ると、突然10人くらい保育士がいなくなる（笑声）。怖いこともあるので、結局、実践というのは一気には変わらない。本当にちょびつとずつなんですね。ちょびつとずつ変えて、こっちも変えて、少しずつ変えながら、それがこっちとこっちがつながりあって。というあんばい、バランス。バランスというのは動かないという意味ではなくて、絶えず動いている。そろそろ保育はどうなる？ 先生が1人変わり、子どもが変われば保育は変わっていく。そこをどういい方向に1歩踏み出すか、2歩踏み出すかだと思うので、ぜひ皆さん方もそういうことを考えてほしい。

そして、私の話をひっくり返すわけではないんですけど、皆さん方が私の話に感動することは思うんですが、万が一、感動して、「あしたから愛と知の循環でいく!!」なんて叫んでも無駄なんです（笑声）。言葉で保育は変わらないです。どのくらい身にしまして実践の際、小さいことを変えていくのか。ぜひ小さいことを変えてほしいと思っています。

以上です。どうもありがとうございます（拍手）。

○司会者 無藤先生、ありがとうございました。

本日は、無藤隆先生のご著書と監修いただいた書籍販売を引き続き行っています。午後はC学舎でも行っています。

乳児保育部会部会員・上垣内伸子より部会を代表して無藤先生にお礼を申し上げます。上垣内先生、よろしくお願ひいたします。

○上垣部会員 無藤先生、どうもありがとうございました。

部会を代表してということなので、乳児保育部会において、その観点から一言。初めの言葉は、子どもが出会う全てのものを愛するようになることが幼児教育の使命なんだ。子どもが出会うもの、日々好きになっていく、そのことが大事というお話をしました。

私たち乳児部会は、お茶の水女子大学こども園のゼロ歳児クラスの6人の子どもたちの物と場への関わりというところに焦点を当ててポートフォリオの分析を行ってきました。とっても仲よしのグループになっちゃったのはどうしてかというと、そのポートフォリオを、ゼロ歳の子どもたちから、日々の出会いから世界を好きになっていくんだなという姿を感じさせていただいたからだと思っています。ポートフォリオだから、子どものその愛が、先生が書き、それを読んだ保護者の方がまたコメントを書いてくださるという二重、三重の愛に包まれていたものだと思います。それを、ひかりのくにさんから本にしたもの

が今日ありました。よかつたら見てみてください。そして、C学舎のところには、ポスターで6人の子ども全員のものがありますので、それも見ていただいたらと思います。

どうして私たちが楽しかったかというと、愛と知の循環というのが乳児部会です。誕生から始まるのだというのが、今日のお話からも感じてきたことです。ゼロ歳児クラスの子どもたち、好きになってくると、知るということがセットなんだということを先生はおっしゃいました。今日の例では幼児のことが多かったですが、好きになることと知るということがセットになる。それが愛と知の循環。ゼロ歳の知るの姿、私たち、あのポートフォリオからいっぱい感じたな。だからこそ私たち、あんなに楽しく研究してこられたんだなと思いました。

多くの実践の共鳴が保育を動かしていくと、最後にエールを送ってくださいました。私たちは、乳児保育はいよいよ大事になってくると思っています。乳児保育のフィールドから、にもかかわらず好きということを追求していきたいと思います。ゼロ歳からの発信で無藤先生を揺さぶっていきたいと思います。皆さんも御一緒に揺さぶっていきませんか。

無藤先生、今日は本当にどうもありがとうございました（拍手）。

○司会者 大きな拍手でお送りください。ありがとうございました。

（満場拍手）

では、事務連絡を申し上げます。

この後、午後の無藤先生の講座をお申込みの方々には、小さな質問者カードが渡っておられます。席にはテーブルがありますので、こちらで記入いただきたいと思います。皆様の質問へ、全員の方へ無藤先生からのお答えは難しいと思いますけれど、参加者がとても多いので。出入口に乳児保育部会のメンバーが箱を持って待機しています。出られるときに渡していただければと思います。確実に無藤先生のお手元に届けます。

昼食会場の御案内もさせていただきます。昼食の会場は、こちらの上階のカフェテリアが御使用いただけます。机と椅子は動かすことができませんが、広く明るい食事ができるスペースです。カフェテリア自体は販売などの稼働はしておりませんので、お手元に持つていらっしゃる昼食をそこで食事をお召し上がりください。ごみは、大変申し訳ありませんが、お持ち帰りいただきたいと思います。

また、C学舎のほうでも2階、3階のラウンジと、2階の教室のみ食事に御使用いただけます。4階は担当者の場所になっておりますので、お入りにならないようお願ひいたします。

午後からの会場は、全てC学舎のほうになります。まだ受付がお済みでない方も、既に受付は移動しております。C学舎のほうでお願いします。

それから、書籍購入の関係は、まだ会場受付でできます。こちらでも買うことはできます。

先ほど、上垣内部会員からもお話がありましたが、乳児保育部会の軌跡であるポスターや、保育現場で愛されている布で作成されてモップンボールなど、これも3回とか2回とか参加されていらっしゃる方はご存じだと思いますが、乳児のための特別な本大学のお部屋に子どものための絵本や遊具とともに御覧いただけるようにしています。1時半までゆっくりとお過ごしください。1時半からは各分科会、講座も全てC学舎となります。時間までに各教室にお集まりください。

本日は乳児保育フォーラムに御参加いただきまして、ありがとうございました。ぜひ来年度もお会いできることを願っております。

それでは、各講座の分科会で最後まで楽しい語り合いと学び合いのお時間をよろしくお願いします。本日は本当にありがとうございました（拍手）。

——了——

文字起こしに際し、音声の欠けを補うなど、多少修正を行なっています。